

## 文化のきしみに耳を澄ませる

レイモンド・ウィリアムズの『キーワード』

大久保 桂子

学生なら誰しも経験することにはちがいないが、出席とはとりあえず無関係に、どうしてもサボれない授業というものが、一週間のうち一科目はあるものである。史学科に進んだ最初の年に受講した史料講読の時間は、私にとってはそうした恐しい授業のひとつであった。予習不足のまま出席した日の九十分は、まさに生きた心地がしなかったのを思い出す。今にして思えば、歴史を学ぶことの厳しさをたたき込まれたあの授業こそ、学問の世界というものを垣間見た私の原初体験であったのだけれども、その当時は毎週のノルマを消化するのに悪戦苦闘といった有様であった。

ケネス・クラークの *Civilization* がそのときのテキストで、今は『芸術と文明』というタイトルで翻訳が出ているから、ご存知の方も多いと思う。あるとき、文明 *civilization* と文化 *culture* の違いについて、注意を促されたこ

とがある。文明とは人間の物心両面にわたるもろもろの営み全体をさすのに対して、文化は人間の知識や芸術にかかわる行為を意味する、というようなことを学生の側は答えた。「キーワード史観」という耳慣れない言葉に接したのはそのときであった。キーワード史観の提唱者レイモンド・ウィリアムズの名を知ったのも、それが最初であったと記憶している。

キーワード史観とはたとえば、本来は動植物を「育てること」を意味していたカルチャーという言葉が、人間の知的活動をさす言葉に転じたその経緯じたいが、ある社会——ここではイギリス——の歴史変化を知る指標となる、という視点である。表現され使用されている言葉と、その言葉の意味を機能させている社会との関係を有機的にとらえることは、とりたてて難しい言語学理論を持ち出さなく

とも、歴史をやる者のイロハに属する事柄なのだが、当時の私にはひとときわ新鮮に響いたものである。

\*

早くから日本でも訳出紹介されたウィリアムズの『文化と社会』（一九五八年。以下発行年はすべて原著のそれ）の序論には、キーワード史観を具体的に示す例として、五つのキーワードがとりあげられている。インダストリ、デモクラシー、クラス、アート、それにカルチャーの五つである。

本来は「勤勉」を意味した「インダストリ」は、一八世紀末に語義が変化して、「産業」を意味する言葉になった。「デモクラシー」が古代ギリシア以来、「衆愚政」と隣り合わせの「群衆による支配」を意味していたことはひろく知られていよう。デモクラシーを日常英語に定着させた契機ははっきりしていて、アメリカ独立革命とフランス革命であった。この二つの事件をきっかけとしてデモクラシーは日常的な語彙の仲間入りをしたけれども、イギリス人は決して自分の国を民主主義国とはよばなかった（実際、当時のイギリスが民主主義国であったとは到底いえない）。イギリス人にとってのデモクラシーは、理想の政治体制では決してなく、ジャコバン主義、共和主義といった、既存の体制を脅す危険な思想と結びつけて考えられていたのである。

同じように、「クラス」という言葉がそれまでの「等級」「学級」という語義に加えて、「階級」を意味し始めたのも一八世紀末のことであったし、「アート」が人間の「技能」から「芸術」という特殊な創造的行為を示す言葉に転換したのも、一八世紀末のことであった。

こうしてみると、以上四つのキーワードが現在普通に使われている意味を獲得した時期は、どれも一八世紀末、つまりイギリスの産業革命期に一致していることがわかる。「カルチャー」もまたこの例にもれない。この言葉も産業革命を経たのちに、初めて私たちが「文化」と訳すような意味をもつようになった。それまでこの言葉は通例、何かの養育 culture of something というように、育てる対象を明記して使われていた。人間の知的営みを示す単独の「カルチャー」の成立は、実は一九世紀のことなのである。「文化」という意味での「カルチャー」という言葉は、つまり、ただか二世紀足らずの歴史をもっているにすぎないことになる。

『文化と社会』のテーマは、一八世紀末から一九世紀にかけて独特の意味をもつようになった——そしてその間にもその含意を微妙に変化させてきた——「カルチャー」が、当時のイギリス社会の変化とどのように対応しているのかを記すことにある。もう少しわかりやすくいうところである。

産業革命によってイギリスは工業と営利を第一に置く社会になった。これに対してある人々は、ある種の反発を込めて、人間の道徳面や知的活動をこれとは異なった領域に位置づけようとして、それに「文化」という言葉をあてはめた。つまり「産業」に対峙するものとしての「文化」がまず提示されたのである。だがそれだけではない。産業革命はまた、イギリスにはっきりとした階級社会を生み出し、支配されるべき労働者階級の欲求や願望を、支配する階級が正面から受けて立たざるをえない状況をつくり出した。このとき支配する人々は、自らの知的伝統を「文化」とよび、労働者の社会進出（つまりデモクラシーの実現）を拒む後ろ盾として、文化の保持を訴えもしたのである。

この二つの意味を含んだ「文化」を見事に表現した作品が、実際に一八六〇年代に書かれた。マッシュュー・アーンロドの『教養と無秩序』*Culture and Anarchy* がそれである。アーンロドは、中産階級の富と自由の理念そして労働者階級の無知と粗暴さの両方に、当時のイギリスをおおっている「無秩序」の源泉を嗅ぎわけ、祖国の現状を救うには、個人が自らの知識と人格をみがぐこと、つまり「教養」を育てることが急務だと説いた。アーンロドの「教養」の具体的な内容は、ギリシア的な全人格の教養にもとづく「自己完成」であって、それじたいは今日の目にはいささか陳腐とすら映るし、当てもアーンロドの理想主義に

シニカルな反応を示すイギリス人も少なくなかったようである。けれどもアーンロドの「教養」観は、産業革命後のイギリス社会の変容に対するとりわけ鋭敏な反応とも読みとれるし、なによりもカルチャーという言葉の一九世紀イギリス特有の語感を伝えてくれるように思う。

学生時代、邦訳のみで知っていた『教養と無秩序』の「教養」の原語がカルチャーであることを知って、イギリスと日本の「カルチャー」の用語法の隔たりに軽いショックを受けたのを思い出す。私たちはカルチャーといえれば気軽に「文化」と訳してしまいがちだけれども、ウィリアムズがくり返し言っているように、カルチャーという言葉は、過去二〇〇年間にイギリスが体験した社会の激変に対する痛みに満ちた返答として生成してきたものである。とすれば、かの国イギリスから何かを学ぼうとする私たち日本人にはなおさら——学ぶべきものがあるとして——、英語のキーワード史観だけでなく、訳された日本語に対してもキーワード史観を持つ必要があるように思えてくる（柳父章氏の『翻訳語成立事情』〔岩波新書〕はそのよいヒントになる）。「二段階キーワード史観」とでもいふべきこの手続きをふむことは、言葉と情報が氾濫している時代に生きている私たちには、苛立たしいほど手間のかかる作業であるにちがいないのだけれども。

\*

イギリスを代表するマルクス主義の論客として知られるレイモンド・ウィリアムズについては、日本でも一九六〇年代にニュー・レフトの思想家として熱心に紹介されたことがある。ここでイギリスのマルクス主義者のその後の動向について詳しく述べる資格は私にはないけれども、少なくともイギリスで「文化」の問題に一貫してこだわりつけてきた批評家は、おそらくウィリアムズをおいてはいないと私は信じている。邦訳されているものだけを挙げて、『文化と社会』と並んでかれの代表作とされている『長い革命』（一九六一年）、『コミュニケーション』（一九六二年）、『田舎と都会』（一九七三年）、キールワード史観の集大成ともいえる『キールワード』（一九七六年）、そして文化社会学を提唱した『文化』（一九八一年）にいたるまで、ウィリアムズはつねに、ある時代の文化の研究をたんなる「作品」とその「背景」の分析に終わらせることなく、その文化を生み出した社会との動的関連のなかでとらえるべきだと訴えてやまない。

近著『文化』は、個別的な事例を語りながら議論を進めていくやりかたで真価を発揮するウィリアムズにしては（その意味でかれはきわめてイギリス的なマルクス主義者である）、やや理論がかちすぎで、必ずしも読みやすいとはいえない。私はウィリアムズの文化理論がもっともよく語られているのはむしろ、『長い革命』に収められている「文

化の分析」という章ではないかと思っている。たとえば、文化が生む果実である「芸術」について、かれはいう。

「芸術作品は、それが表現された場である特定の社会のことを考慮に入れなくても正しく理解できると考えたのは、明らかに誤りであった。しかし社会的な説明ですべてが片づくと考えられるのも、同じように誤りである。……芸術は社会の一部である。とはいえ、芸術の外に、芸術よりも重要だとみなさなければならぬような確たる全体（としての社会）があると考えるはいけない。芸術は人間の営みのひとつとして、生産、商売、政治、子育てとともにある。」

そして文化についてはどうか。

「ある文化の歴史は、現実には作用していた社会のさまざまな要素のあいだの関係が、その時のままに組み立てられ、そうした要素が全く対等に扱われているときにのみ書かれうる。文化の歴史は、個々の要素の寄せ集め以上の何物かであるはずである。……私は文化の理論を、生活のしかた全体のなかでさまざまな要素が折りなしている関係を学ぶこと、と定義したい。文化の分析とは、こうした関係が寄り集まった複合体の有機的な構造(organization)の本質を見きわめようとする試みである。」

理論を述べ始めると、ウィリアムズはいつもこんなふう

實際に一八四〇年代のイギリス社会の文化を解明してみせるその手腕は、まさに離れ技というほかはない。

工業国イギリスの地位の確立、自由主義の勝利、チャーティズム、社会政策の開始など、一八四〇年代のイギリスを特徴づける表現はいろいろあるだろう。一八四〇年代の代表的な芸術や文学作品を挙げることも比較的やさしい。

けれどもウィリアムズは、こうした社会の全体としての文化は、富と成功を賛美する中産階級の理想と、この理想を受け入れることのできない現実を体験していた労働者階級の生活感覚との間に生じる、ある種のきしみそのものにあると語る。この時代に書かれた文学作品は、多かれ少なかれ、こうしたきしみを表現しているし、何かが足りないという感覚、現実を越えていこうとする欲求を示している。

とはいえきしみは不協和音ばかりを発するとは限らない。当時の人々の誰もが、産業革命は人間の技と努力が生んだこの世の奇跡だと感じていたし、また、きしみを直すための努力が新しい工業社会のもとで模索され始めてもいた。社会の改良を夢見た人々の努力もまた「文化」である。それは「心が手を差し出す」ような、新しいコミュニティーづくりのはじまりであった。

\*

ウィリアムズの文化理論は、早くからマルクス主義者の内部からも批判をうけてきた。文化を「生活のしかた全体」

というが、どの時代にも必ず複数の生活のしかたがあり、それらはつねに対立し衝突する土台（つまり階級関係）をもっているはずだと論じたのはE・P・トムソンである。

最近では、ウィリアムズの弟子にあたる気鋭の批評家イーグルトンも、基本的にはトムソンと同じ立場から師を批判している。『文化と社会』の本質は一九世紀以来の観念論的理想主義（ロマン主義的ヒューマニズムといってもいい）の焼き直しにすぎないし、そのうえ文化がイデオロギー的な言葉である点を見逃しているのは致命的だとイーグルトンはいう。『長い革命』についても、「革命」が「長期的」だという論理矛盾を犯していて、実はユートピア的な中立党員ぶりの独白にすぎない、となかなか手厳しい（『文芸批評とイデオロギー』岩波現代選書）。

いっぽうレヴィストロース以降の構造主義は、「生活のしかた全体」のなかで人間が行為し、体験することが歴史をつくっていくのだとするウィリアムズの基本的な発想（これはトムソンにも通ずる）じたいに挑戦してきた。構造主義によれば、ある文化は個有の категорияとフレイムワークからなる無意識の構造そのものだから、人間の行為や体験は文化の主体ではなく、構造の作用にすぎないとされるからである。

とはいえ、現在イギリスでおこなわれている文化研究の方向づけに、ウィリアムズの文化理論が決定的な影響を与

えてきたことは、ほとんど議論の余地がないといえると思う。『文化と社会』が書かれた一九五〇年代半ばが、イギリスの文化研究の出発点であったとみてまず間違いない。文化を社会的コンテキストのなかに解放しようとしたのは、むしろウィリアムズが最初ではなかった。たとえバリー・ヴィスの名をまず挙げるべきだという人もいるだろう。けれども、文化と社会の有機的な一体性を説いたウィリアムズの文化理論によって、文化を論ずることは社会を論ずることだというコンセンサスが出来あがったことが、一九六〇年代以降の文化研究の第一歩だったのである。

当然予想されるように、こうした文化研究には、社会学をはじめとする人文諸科学の視角と方法がどうしても必要になってくる。最近になってウィリアムズが「さまざまに関心と方法が一つに集まる場」としての「文化の社会学」を提唱し始めているのは、私にはごく自然なことのように思える。ありきたりの言い方をすれば、「学際的」研究の必要性は、古色蒼然とした政治史をやっていたつもりの私ごときにも、ひしひしと感じられるからなのだ。一八世紀の政治家たちの論戦の舞台を提供したのが新聞であることを知ると、ジャーナリズムという現象（これもまた文化である）が気になり始めるし、ジャーナリズムの読者層の問題を追いかけていくうちに、当時のイギリスの教育水準（文化程度！）を考えないわけにはいなくなる。ところがジ

ャーナリズムにしる教育にしる、伝統的な歴史学の方法では解決できない社会学的な問題を含んでいる。私は今でもこの二つの分野の歴史的展望を示してくれる最良の入門書として、『長い革命』の該当する章にあるウィリアムズの解説以外に推薦できるものは見当たらないと思っている。

\*

いまでも文明と文化の違いを説明せよと問われたら、何と答えるべきか。かつて私たち学生が教室で答えたような説明をする人は、今でもおそらく大ぜいいるだろう。それを時代遅れの説明だと私は思わない。私たちが、文化を芸術や思想の総称と考えていること、そして同時に漠としてつかみにくい時代のファッションを語るときにも文化という言葉を用いていることは、とりもなおさず、二十世紀末の日本の文化と社会の、「生活のしかた全体」の、証言だといおう。そう見るまなざし、それがキーワード史観である。

気の利いた答えを出したければ、こんなふうにいってみてはどうだろう。civilization はもとば barbarity（野蛮）の反対語で、礼儀正しく行儀がいいという意味だったのだが、一九世紀になってから、社会と知識の発展した状態（文明）をさすようになった。culture が育てるといいう意味から人間の知的行為をさす文化という意味に転じたのも、一九世紀のことである。そしてこの二つの言葉が一九

世紀に並んで使われたとき、つねに非難された悪役は文明のほうであった。文明は物質的發展で非人間的、文化こそ人間の営為と考えられたからだ、と。

けれども私たち日本人としては、イギリス人がいつ、文明と文化を複数形で表記できるようになったか——ヨーロッパだけが文明と文化の担い手だと思わなくなったのはいつか——を知っておきたい、と思うにちがいない。

その答えは、ウィリアムズの『キーワード』（邦訳は『キーワード辞典』晶文社）の「文明」と「文化」の項に、「決定的瞬間」として書かれている。

（おおくぼ けいこ・兼任・西洋文化史）

レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Henry Williams, 1921—) 文獻抄 (カッペ内の洋数字は原著発刊年)

\* 『文化と社会 1780~1950』若松繁信・長谷川光昭訳 ミネルヴァ書房、一九七三年 (1958)

\* 『刃境』小野寺健訳 講談社、一九七二年 (1960)

\* 『長い革命』若松繁信他訳 ミネルヴァ書房、一九八三年 (1961)

\* 『コミュニケーション』立原宏要訳 合同出版、一九六九年 (1962)

\* 『田舎と都会』山本和平他訳 晶文社、一九八五年 (1973)

\* 『キーワード辞典』岡崎康一訳 晶文社、一九八〇年 (1976)

\* 『文化とは』小池民男訳 晶文社、一九八五年 (1981)

\* 『魔法のシステム』(1960) 田村進編『文化革新のウィジヨン』合同出版社、一九六二年所収

\* 『社会主義社会をめざして』(1968) 佐藤昇編『現代人の思想18 社会主義の新发展』平凡社、一九六八年所収

宮沢康人「ニューレフトの文化史・文化論」『思想』一九六三年一月号)

T・イーグルトン『文芸批評とイデオロギー』高田康成訳

岩波書店、一九八〇年 (1976)

井上俊「言葉への『意識の刃』——レイモンド・ウィリアムズ『キーワード辞典』」(同『遊びと文化——風俗社会学ノート』アカデミア出版会、一九八一年)